

Title	島崎晴哉著 ドイツ労働運動史：根源と連続性の研究
Sub Title	Haruya Shimazaki; The history of German working class movement, 1963
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.12 (1963. 12) ,p.1242(88)- 1246(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19631201-0088
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631201-0088">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631201-0088</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

島崎晴哉著

## 『ドイツ労働運動史——根源と連続性の研究——』

飯田鼎

ドイツ労働運動史の研究は、わが国ではようやくはじまったばかりである。第二次世界大戦後、ドイツは東ドイツ・ドイツ民主共和国、西ドイツ・ドイツ連邦共和国として、二つに分裂し、ドイツ労働運動史の研究も、両国の政策の強い影響のもとにおこなわれてきた。われわれは同じドイツ史研究についてもはつきりと異なれる二つの立場の存在を認めなければならない。しかし労働運動史を研究する立場からいえば、ドイツ民主共和国のそれは、あまりにもイデオロギッシュであり、思想的であり、まずひとつの大きな前提から出発して、あとはそれを証明するために資料が羅列され、客観的でないような印象をうけるものも少なくない。また西ドイツの場合には労働運動史そのものにかんする研究が非常に少なく、二、三の実証的なすぐれたものを除けば、あとは政治心理学的な研究が圧倒的である。総じてドイツ民主共和国では、労働運動史研究が意欲的に

つづけられ、ライプツィヒのカール・マルクス大学、フンボルト大学やハレのマルティン・ルーテル大学において、若い研究者によって精力的な研究がつけられていることが注目される。

ところでわが国ではドイツ労働運動史の研究にかんする論文や単行本はきわめて少なく、従来みるべきものがほとんどなかったといっても過言ではない。ドイツ産業革命史研究がようやくはじめられた程度にとどまる。その意味においてこの度、島崎晴哉教授によって『ドイツ労働運動史』がまとめられたことは意義深いものがあるし、わが国における外国労働運動史研究に貢献するところ大であるといわなければならない。

「根源と連続性の研究」という副題が暗示するように、従来、ドイツ労働運動史の起点は、一八六〇年代に求められ、労働運動と相前後しておこった社会主義運動のなかに見出されるというのが通説であったが、著者はこれにたいして、一八四八年のドイツ三月革命以前の労働者階級の運動にその根元をおくべきであると主張する。

「本書でとりあげようとする時期は、従来のドイツ労働運動史の通史的説明のなかでは、ほとんど放置され、無視されてきた部分である。従来のドイツ労働運動史の叙述は、一八六〇年代を運動のはじまりの時期とし、それ以前については前史的な形で小さく言及するのが一般であった。……いわゆる Vormärz (三月以前)にさかのぼって運動の展開過程をあとづけるような試みは、私の寡聞にもよるが、例えばフランツ・メーリンク (Franz Mehring, 1848-1919) の『ドイツ社会民主党史』のような少数の

例外を別とすれば、ほとんど見られなかったといつてよい……」

そして著者は、ドイツ労働運動史のこの黎明期を研究対象として選んだ理由として、(一)ドイツ労働運動のちに豊かに開花せしめた理論的感覚がすでにその時期に、萌芽的に準備されつつあったこと、(二)ドイツ労働運動の自然発生性の根源の追求、(三)ドイツ労働組合運動への展望の問題、労働組合的機能をそなえた組織体の一八四八年以前における存在の問題、(四)ドイツ資本主義の後進性によって規定されるドイツ労働運動の特殊性の問題、(五)国際労働運動とドイツ労働運動との結びつきの関連。以上のような問題意識から著者は出発するのであるが、つぎの諸章から成っている。

まえがき

序章 ドイツ労働運動史研究の方法によせて

第一章 Vormärz における経済的發展

第二章 労働力の構成

第三章 労働者の状態

第四章 統一と自由のための運動のなかで

第五章 労働組合運動の先行組織

第六章 正義者同盟の結成

第七章 シュレージエン織布工の蜂起

三八〇頁もの本書をよみ通すことは容易ではないが、しかしたしかに本書は、世の多くの労働運動史のように、年代記的な記述で一貫されていないという点で、注目すべきである。著者によれば「chronological な部分と problematical の部分、縦割りの叙述と横割りの説明

とが、一冊のなかに混在同居する形となっている」のであり、叙述的説明的であるよりは分析的である点が、本書のユニークな点というべきであろう。すなわち著者はつぎのようにいう。

「峰から峰への歴史」とか、「政策対応的な運動史」とかいわれることがしばしばある。反体制史としてまとめられた労働運動史や、時代の経過のなかで運動の主要な舞台をつないでゆく労働運動史がそのように呼ばれるのである。労働運動史が反体制史にしばりあげて書かれなければならない必然性を私は認める。しかしだからといって、素材たる運動のすべてが反体制のものだということにはならないだろう。運動の自然発生性の分析は、高い比重を占めなければならない。」

この指摘は甚だ重要であると思う。なぜなら従来労働運動史の研究の場合、賃労働者の形成過程、労働力構成、労働市場の存在形態などが、労働者状態という形で統一的に把握されることの必要性が強調されながら、ともすれば、反体制的視点を重点をおきすぎ、賃労働の視点における把握が不十分であるか、もしくはそれら相互の関連が有機的に理解されないうらみがあるからである。

著者は、第二章労働力の構成において、主としてシュトラウス (Strauss, Rudolf) およびクチンスキー (Kuczynski, Jürgen) の諸業績を基礎として、十九世紀ドイツにおける労働力構成を、繊維工業労働者、機械工、手工業労働者、農業労働者、マニユファクチュア・工場労働者および鉱山労働者について考察し、第三章、労働者の状態においては、労働運動の出発点ともいえるべき労働者状態にかんす

る理論的分析が試みられており、著者もつとも力を注ぎ、またつぎの第五章のための前提として、それとともに本書のもつとも重要な部分をなしていると思う。著者はここで明らかにドイツにおける賃労働の特殊性を析出しようと努力される。すなわち、エンゲルスの言葉をかりて、「以前の歴史的段階において労働者の相対的幸福の基礎であったところのもの、すなわち農耕と工業との結合、家屋と菜園と畑の所有、住宅の安全が、こんにち大工業の支配のもとでは、労働者にとって最悪の極端になっているばかりでなく、全労働者階級にとっての最大の不幸、その正常のたかさ以下への賃金の引き下げ、しかも個々の部門や地方についてばかりでなく、全国にわたる類例のない引き下げの基礎になっている」という工業的農民が、ドイツの賃労働の存在形態を規定するものとのべている。そしてさらに、「ドイツの労働力形成がイギリスなどと比較して、十九世紀後半にいたってもなお大量の工業的農民の存在によって特徴づけられるような特有な過程を辿ったことに対応して、Vornitzに形成され蓄積された当の自由な労働者も、多かれ少なかれドイツ的な過渡期の労働者の性格を帯びているといわなければならぬ(二〇三頁)」という指摘からも明らかのように、ドイツにおけるプロレタリアートの形成は、「プロレタリア化された手工業者」の生成そのものと密接な関係があったという点からして、「自由」な工業労働者なるものは、「この手工業との関連をはなれては十分にとらえることができない」という視点につながるのである。

ドイツのプロレタリアートのこのような特殊性、すなわち、マル

クスの表現をかりるならばドイツの資本主義が、「直接生産者たちの状態を悪化させ……旧来の生産様式の基礎の上で、彼らの余剰労働を取得するといういわゆる『プロシヤ型』」を辿ったところから、プロレタリア化した手工業者および職人が、この黎明期の労働運動における中核を形成するのであって、著者は、これを第五章においてのべている。

「労働組合運動の先行組織」というこの章は、おそらく著者もつとも力を注いだところとみられ、著者の研究の深さを如実に物語っている部分である。著者はまず、Vornitzに典型的な労働者組織として(一)救済金庫制度、(二)労働者教育協会、(三)ストライキ団体をあげ、三者はそれぞれ共済的機能、教育的・文化的機能および経済的機能を果し、それが相互無関係に存在したのではなくして、むしろしばしば運動の過程で統一の方向への働きかけもみられたところから、これらの三つの組織を、労働組合の先行組織 (previous organization) として把握している(二六二頁)。これらの組織について、簡単に著者のいうところをきくならば、(一)については、労働組合運動において、共済的組織、たとえば友愛協会が果たした役割がいかに偉大であったかを強調し、「労働組合が友愛協会を偽装したのではなく、友愛協会が労働組合の実質を發揮したのである」(二六六頁)とのべているのは、各国の労働運動の歴史に徴しても明らかであり、卓見であるといわなければならない。とくにのちに社会保険制度の起源といわれた救済金庫制度が、炭坑夫、機械工さらに進んで工場労働者に浸透してゆく必然性を、ツンプトの崩壊と工場制工業の発展の過

程の中で追求している。ストライキ団体とは救済組織とは別に闘争的な団体であり、救済制度によっては労働組合の課題のごくわずかな部分しか果せないという事実にかんがみ、救済金庫の存在を危くしないためにも、新しい組織が必要であった。その意味では、労働組合のような強固なものではなく、闘争時の一時的なものであったのである。

つぎに教育協会であるが、著者によれば、さきの二つの団体が、労働者の救済と闘争のための団体であったとすれば、教育協会は、労働者の知識と教養をたかめ、日常の問題について討論する機会を与え、また休息と社交の場を用意しようとするものであり、当然、政治的ならびに労働組合的労働者運動の先駆者とみなすことができるのである。一八三〇年代および四〇年の教育協会を、著者はつぎの三つの類型にわけて説明している。第一の類型は、(I)市民的な協会、(II)主として工業組合の枠内にある労働者と職人の参加・イニシアティブに基づく、あるいは自主的な結成として生じた一般的な手工業者協会、労働者教育協会および社交会、(III)のグループは、そのメンバー構成において専ら専門職的な枠に限るわけではなかったが、特定業種の職人から出発した社交会および教育協会、第二類型としては、ツンプト関係の職人労働者および親方であって、主としてインテリゲンチヤによる上からの啓蒙、指導による情操教育が中心であったところから、古い身分的な関係が温存されており、第一類型に近い要素をもっていたが、第三類型になると、それが印刷工や機械工の場合のように、次第に工場プロレタリアートがその主要

なメンバーとなるにつれて、労働組合の先行形態としての面目を明らかにしてくるというわけである。従って、第一類型から第三類型までの教育協会の形態は、時期的にも相互に重なり合っており、ドイツ資本主義の推移の過程の中で、労働運動におけるその比重が、次第に、第一から第三に移って移行してゆくことと理解できないであらうか。この間の関係は、必ずしも明らかではないように思う。

以上筆者は、著者の基本的な態度の上に立って、その重要な問題点を整理したのであるが、この力作を充分に紹介する能力がないのを残念に思うのみである。

よく新鮮な問題意識の上に立って、広く諸家の見解を渉猟している実証的精神には感嘆のほかはない。その勉強に敬意を表すものである。とくに叙述が分析的で物語りに流れなかったのは著者の理論的把握のきびしいことを物語るものであり、同じ労働運動史の研究に志す者として教えられる点も少なくなかった。ただいささか網羅的で、前後の関連が把握し難い点もあったように思う。それからいまひとつは、反体制的な運動としては、第六章に正義者同盟の結成としてふれられてはいるが、この運動と労働組合運動との結びつきがどうなるのか、ふれられていないし、とくに一八四八年のドイツ三月革命における労働者階級の動きについての叙述が全く欠けているのは惜しまれる。三月以前における労働者運動をこれほど克明に分析されながら、それがどういふ結果になるのか、新鮮な問題意識の結論からみられないような気がしてならない。

もちろん著者は、これからやがてその部分について明らかにして

くれると思うが、ともかくわれわれは、この書によって、わが国における戦後の外国労働運動史にかんする研究が一段とゆたかにされたことを著者とともに喜びたい。

(青木書店・一九六三年十月刊・A5・四三〇頁・一三〇〇円)

——一九六三・一〇・二〇——

### 次号目次

#### 論 説

- 二部門モデルにおける分配率の決定……………富田重夫
- 二部門経済モデルにおける均衡成長について  
——展望と一つの積極的分析——……………川又邦雄
- ヒルファディングの株式会社論にかんする一考察  
——とくに信用論との関連において——……………飯田裕康

#### 資 料

- 第一インターナショナルにかんする一史料(その二)  
——総務委員会について——……………飯田 鼎

#### 書 評

- C・N・ワードパーキンス著  
『一八四七年の商業恐慌』……………寺尾 誠

#### 新刊紹介

## 新刊紹介

館 稔著

### 『人口分析の方法』

人口を分析する、とひと口にいても、いろいろの局面からの接近があって、その範囲はひろい。こんにち人口を研究する学問のことをデモグラフィ(Demography)という名称でよんでいるが、これには社会学からの接近も、経済学からの接近も、すべてこれらを包括している。

しかし、人口そのものを直視するとき、そこにあるものは、生れたての赤子から、百歳を越えた老人までの男女の集団(静態)である。年々生まれ年々死んだ数(動態)が、この人口につけ加えられて殖えていくという新陳代謝が繰り返えされている。子供を生む年齢の婦人が多ければ、多くの子供が生まれるであろうし、老人が多ければ死ぬ数は多いであろう。他の事情がひとしきり、このことは正しい。

新刊紹介

このように人口には、人口の基本集団の状態如何によって、人口増加の多少が左右される。ここに人口そのものの分析方法が要請されてくる。あたかもそれは、かつてポリテイカル・イコノミーとよばれた経済学が、やがて均衡体系によってまとめられ、価格中心の分析がおこなわれるようになって、イコノミックスと改名し、独自の分析方法をもつようになったのと同じである。

ポリテイカル・イコノミーの当時に、人口は経済学の体系のなかで重きをなしたが、イコノミックスの時代に移って、人口は経済学の映像の外に追いやられた。ここに人口独自の分析方法が発達する。時の機運が育成されたといつてよいだろう。

人口を分析する基本となるものは、いまここへのべた人口の分析方法を駆使するかどうかにかかっている。統計を媒介として人口と経済・社会を分析するとき、人口の時間的・地域的分析を通じてそこにあらわれる結果の比較は、そのまま経済や社会の時間的・地域的相違を反映しているのであって、それなればこそ、人口分析は社会科学の種々の分析の基盤におかれる重要な研究なのである。

このような意味で、人口分析の方法をまとめた書物が要望されるが、これが意外に少ない。本書は著者が多年の人口研究を通じて選り抜いた人口分析の基本方法を、高級テキスト風にまとめたものであって、専門に人口を学ぶ学徒にとって好個の座右の書となるであろう。この種の書物には基本的な方法の解説のほか、実際の分析の筋道をしめした方法の適用の仕方が知りたいが、さいわい著者によって別個に用意され、本書の続編として刊行されることである(本書はしきき)。これを二部作として待ちこがれるのはひとりわたくしばかりではあるまい。なお、とくに本書は各所にあげられている文献目録が貴重である。(古今書院・形成選書・昭和三八年九月刊・小B6・二七六頁・六八〇円)

—安川 正彬—

両角良彦/御園生 等  
古藤利久三/正田 彬  
千種義人著

### 『産業体制の再編成』

「日本経済は貿易自由化の段階を迎えて、

九三(二四七)